

生成AI特許分析GPTs（角淵由英氏開発）の総合調査

1. ツールの概要と開発目的

「生成AI特許分析GPTs」は、弁理士の角淵由英氏が開発した**特許情報分析に特化したエージェント型GPT**です。ChatGPT上で動作するカスタムGPTとして提供されており、ユーザーが簡単な技術内容の文章を入力するだけで、関連する**Web上の技術情報と特許情報を往復しながら段階的に調査・分析**を行います^{① ②}。角淵氏はこのGPTを2025年5月に自身のNote記事で公開し、生成AIを**特許調査業務に役立てる**ことを目的に開発したと述べています^①。従来専門知識や時間を要した特許情報の分析を、生成AIの力で**効率的かつ網羅的に**実施し、ハイレベルな調査レポートを自動生成することが狙いです^③。特許検索競技大会で最優秀賞を受賞するなど特許調査のエキスパートである角淵氏が、自身の経験を踏まえ「**簡単な入力で高度な分析を可能にするツール**」として設計しました^{④ ⑤}。

2. 主な機能と技術的特徴

特許番号	出願人	発明の概要	出願日	主な特徴
US20020139617A1	NCR Corporation	RFIDラベル付き商品の重量を測定し、RFID応答と比較して購入を確認するセルフサービスチェックアウトシステム	2002年	RFIDラベル、重量測定、支払い処理の統合
US20080211671A1	IBM Corporation	RFIDタグと距離・方向検出リーダーを使用して商品を検出し、セキュリティアラームをトリガーするセルフチェックアウトキオスク	2008年	距離・方向検出、セキュリティシステムの統合
US8825531B1	NCR Corporation	顧客が商品情報を入力し、支払いを行う自動セルフチェックアウトシステム	2014年	顧客入力、支払い処理、情報提供の統合
US20210264756A1	Amazon Technologies, Inc.	ショッピングカートを購入者のオンラインカートとリンクし、商品を自動的に追加・削除するシステム	2021年	オンラインカート連携、自動商品管理
US7461785B2	NCR Corporation	購入確認を強化するセルフチェックアウトシステム	2008年	購入確認の強化、セキュリティ機能

図：GPTによる関連特許一覧の出力例（RFIDセルフレジ技術に関する主要特許と概要）^⑥

生成AI特許分析GPTsの大きな特徴は、3段階の自動分析フローを備えている点です^⑦。ユーザーが調査対象の技術について一文程度で入力すると、GPTが以下のステップで情報収集と分析を行います：

- 技術概要の一次調査（Part 1）** – 入力内容から技術の背景・仕組みを把握し、関連する技術要素や導入事例をWeb情報からまとめます^{⑧ ⑨}。例えばRFIDセルフレジを入力した場合、その技術原理や業界動向の記事やニュースから引用付きで整理します。
- 特許情報の分析（Part 2）** – 次に関連する特許データを調査し、主要な特許の一覧（特許番号、出願人、発明概要、出願年、特徴）を自動抽出します^{⑩ ⑪}。上掲の図のように、NCR社やIBM社など重要プレイヤーの特許を列挙し、技術分類（IPC/CPCコード）や出願年の推移も分析します^⑫。さらに特許の被引用件数やPCT出願状況を参照し、**特許の質・技術的影響力**まで評価する高度な分析も行います^⑬（Google Patentsのデータを参照）。

3. **ビジネス展開・規制の分析 (Part 3)** – 続いて、その技術の商用化事例や市場動向、資金調達、関連法規制などを調べます 14 15。Web上のニュースやプレスリリースから企業の導入事例や規制動向を収集し、前段の特許情報との整合性も検証します 16（例えば、特許に記載の技術要素が実際の製品導入事例で確認できるかを比較）。

以上のステップはユーザーが「OK」入力するだけで順次進行し、最終的に各種情報を統合した高精度なレポートが得られます 17。生成AIモデル（OpenAIのGPTシリーズ）による**自律的なエージェント動作**と、Web検索・特許データベース（JustiaやGoogle Patents等）からの情報取得を組み合わせることで、幅広い情報源に基づく分析が可能になっています 3 18。特許分類コードの抽出や上位出願人のランキング、被引用数による重要特許の抽出など、**特許分析の専門技術**が盛り込まれている点も特徴です 12 13。まさに「特許とWeb情報を往復しながらブラッシュアップする高精度リサーチGPT」という触れ込みどおり、段階ごとに情報を精査・追加し分析内容を深めていく設計になっています 2。

3. 実際の活用事例

角淵氏の公開したデモンストレーションによれば、本GPTsは**新規技術やビジネスアイデアの特許動向調査**に有用です。具体例として「RFIDタグを用いたセルフレジ」技術を入力したケースでは、以下のような包括的レポートが自動生成されました 9 19：

- **技術概要の整理:** RFIDセルフレジの仕組みや利点が説明され、従来のバーコード方式に比べ会計時間を約1/3に短縮できること、ユニクロなど大手アパレル企業で広く導入されていることが紹介されました 9 19。
- **関連特許の分析:** NCRやIBM、Amazonといった主要企業によるセルフレジ関連の特許がリストアップされ、それぞれの発明内容や特徴（例：RFIDと重量計測の統合、セキュリティ機能の付加、オンラインカート連携など）が整理されました 6 18。特に被引用数の多い重要特許や、日本企業では東芝テックの関連特許にも言及しています 13 20。
- **実装例・市場動向の調査:** ユニクロのセルフレジ導入事例（全商品にRFIDタグを貼付し、専用リーダーで一括読み取りするシステム）や、東芝テックが博物館ショップに導入した事例、スタートアップ企業アスタリスク社のRFIDセルフレジ製品発表など、業界での実際の活用例がまとめられました 14 21。併せて、RFID導入に伴うコストや人件費削減効果、関連企業の資金調達動向、プライバシーや電波法などの規制事項についても触れられています 22 23。

このように、本GPTを使うことで**ある技術分野の特許ランドスケープと市場状況を短時間で把握**できることが示されています。実務上は、新製品開発時の先行技術調査や競合分析、研究開発テーマの特許動向把握などに活用でき、企業の知財戦略立案や技術企画にも有益と考えられます。特に技術のホワイトスペース（未特許の空白領域）の発見にも役立ち、例では「AIを用いた不正検出の自動化」や「環境要因による読取精度改善」といった今後注目すべき未開拓分野がGPTにより示唆されました 24。こうした活用事例から、生成AI特許分析GPTsは**企業・研究者が効率良く特許情報を調査し、新たな発見を得るためのツール**として期待されています。

4. 導入している企業や団体

現時点で「生成AI特許分析GPTs」を特定の企業が公式導入した事例は公表されていませんが、**知財業界全体で類似の取組みが広がりつつあります**。角淵氏自身が所属する弁理士法人レクシードでも、セミナーや記事執筆を通じて生成AIの活用を推進しており 25、同様のGPTツールを業務に取り入れる可能性があります。実際、他の知財コンサル企業では**カスタマイズGPTの導入事例**が始まっています。例えば、知財情報コンサルティング会社イーパテント社長の野崎篤志氏は、自社で作成した複数の特許検索・分析GPTを2024年に一般公開し、人工知能学会全国大会でも発表を行いました 26。これらのGPTは特許検索式の自動生成や、特許調査に関するQ&Aサポート（社内の知見を学習済み）などを実現しており、無料で誰でも利用可能な形で提供されています 27 28。また、特許情報分析サービス企業のPatentfield社は、自社プラットフォーム

「Patentfield」に生成AI機能を組み込み、大量の特許文献をAIで要約・分析する「Patentfield AIR」を提供しています²⁹。Patentfield AIRでは検索結果からワンクリックでGPT要約を実行でき、特許文書の査読時間を最大65%短縮できたと報告されています³⁰。さらに、リーガルテック企業のTokkyo.Ai社もChatGPT-4を活用した特許関連ツールを開発しており、ビジネスアイデアやキーワードを入力するだけで特許明細書のドラフトを自動生成し、**出願書類作成時間を90%近く削減**した事例もあります³¹。

このように**知財分野の企業や団体が続々と生成AIを業務プロセスに導入・検証**している状況から、角淵氏の生成AI特許分析GPTsも今後、特許事務所や企業の知財部門で活用が進む可能性があります。特許調査の専門家が開発した実践的ツールであるため、知財実務家のコミュニティでも注目されており、今後類似ツールとの連携やカスタマイズを行うケースが出てくることも考えられます。

5. 関連する特許・知的財産との関係

「生成AI特許分析GPTs」は**公開特許データやWeb情報**を材料として分析を行うため、基本的に既存の特許文献や記事を利用しています。そのため、特許情報そのものは公開資料であり知的財産権上の問題はありませんが、**ユーザーが入力する内容には注意が必要**です。角淵氏自身、「未公開の発明情報を生成AIに入力する際には注意が必要」であり、依頼者の了解なく機密情報は入力しない運用をしていると述べています³²。機械学習モデルに企業の未発表アイデアを入力すると情報漏洩のリスクがあるため、このGPTsも**公開可能な情報の範囲内で活用することが推奨**されます³²³³。一方で、本GPTの分析結果から**新たな特許戦略の示唆が得られる**点も見逃せません。先述のようにGPTのレポート中で「技術的ホワイトスペース」として言及された未開拓分野は、今後その領域で特許出願を検討する上で貴重な示唆となります²⁴。つまり、本ツールは**既存特許の分析だけでなく、今後取得し得る特許のヒントも提供**できるのです。

なお、生成AI特許分析GPTsそのものはOpenAI社のGPTモデル上で動作するアプリケーションであり、角淵氏がこの仕組みに関する特許を取得しているという情報はありません（2025年5月時点）。現在は**オープンな形で公開**されており、知的財産というより知見の共有・実証という位置づけですが、将来的に本GPTの改良版や周辺技術について特許出願がなされる可能性は考えられます。知財業界では、AIを活用した種々の発明について特許出願が増えており、生成AI関連の特許出願件数も2020年以降急増傾向にあります³⁴。角淵氏のGPTも、今後アップデートや周辺ツール開発が進めば、そのアルゴリズムや応用方法が知的財産として議論される可能性があります。ただし現状では、特許分析GPTsは**公開特許情報を活用する補助ツール**として位置づけられ、知財戦略上のインサイト提供に貢献するものとなっています。

6. 専門家やメディアによる評価・反応

知財分野の専門家やメディアは、生成AIを用いた特許分析ツールに対しおおむね**期待と慎重さの両面**から評価しています。角淵氏自身も知財実務情報Lab.で連載記事を執筆し、生成AIの特許調査への活用方法を発信していますが、その中で「生成AIは万能の魔法の箱ではなく、あくまで補助ツール」と強調しています³³。特許調査のプロセスでAIが有用でも**見落としや誤判断の可能性**は否定できず、最終的な判断は人間が行うべきとするのが専門家の共通見解です³³。「AI任せにせず、人が責任を持ってレビューする姿勢が必要」という指摘は、情報漏洩や権利侵害への懸念とも結びつき、企業が生成AI導入に慎重になる理由として挙げられています³³。一方で、その慎重さと表裏一体で**大きな期待も表明**されています。野崎篤志氏や上村侑太郎氏（LeXi/Ventブログ執筆者）らは口々に、「**特許情報分析の知見 × 生成AIの能力**」の組み合わせによって**新たな知見が得られる可能性が飛躍的に広がる**とコメントしています³⁵。実務上は、ChatGPTのプロンプトエンジニアリング手法の共有や、特許業務に特化した専用ツール（例：ChatTokkyoやPatentfield AIR）の活用がメディアで紹介されるなど、具体的なノウハウ共有も進んでいます³⁵。

角淵氏の生成AI特許分析GPTsそのものについてのメディア報道はまだ限定的ですが、知財業界のSNSでは公開直後から注目を集めました。角淵氏のNote記事は多くの「スキ」（いいね）を集め²⁶、X（旧Twitter）上でも「特許調査に画期的」「早速試したい」といった反応が見られます（※引用元：X上のユーザーコメントなど）。知財系ブログでも「一般的なChatGPTに聞くよりも、特許の検索・分析に詳しいGPTsに質問する

と良い」という趣旨で本GPTsや類似ツールの活用が推奨されていました³⁶。総じて、専門家は「**過信せず 使いこなせば強力な武器になる**」とのスタンスで本GPTを評価しており、実務効率化や新たな洞察創出への貢献に期待が寄せられています。

7. 公開プラットフォームとアクセス方法

生成AI特許分析GPTsは、OpenAI社のChatGPTプラットフォーム上で**カスタムGPT**として公開されています。ChatGPTの「GPTストア」機能（ユーザーが独自に作成・共有できるGPTの仕組み）を通じて一般に公開されており、ChatGPTのアカウントさえあれば**誰でもアクセス可能**です³⁷。実際、角渕氏のNote記事内には本GPTへのリンクが掲載されており、そのリンク（「ChatGPT - 生成AI特許情報分析」）を開くとChatGPTの画面上で当該GPTが利用できるようになります³⁸。GPTの紹介ページでは「**By YOSHIHIDE TSUNOBUCHI**」（角渕由英による提供）と明記され、「特許とWeb情報を往復しながらブラッシュアップする高精度リサーチGPT」との説明が表示されます²。このGPTはChatGPT上で動作するため、利用にあたって特別なソフトウェアは不要で、WebブラウザからChatGPTサイトにログインするだけで使えます。現在は無料ユーザーでもGPT共有リンクを用いて利用可能ですが、ChatGPTの仕様変更によっては将来的に利用条件が変わる可能性もある旨が公開元からアナウンスされています³⁷。

アクセス方法の概要： ChatGPTにログイン後、角渕氏が公開したGPTリンクをクリックすると、本GPT専用のチャット画面が開きます。そこでプロンプト（調査したい技術の説明文など）を入力すると、上述のPart1～3の分析が順次行われ結果が表示されます。各パート終了時にプロンプトが自動で挿入される（「次のステップに進むにはOKと入力してください」等）ため、ユーザーは指示に従って**続行の入力（例：「OK」）をするだけでフルレポートを得ることができます**¹⁷。最終的にDeep Research（さらなる深掘り調査）用の追加プロンプトも生成され、必要に応じてさらなる高度分析を別途行うことも可能です³⁹。なお、本GPTの利用にはインターネット接続が必要であり、分析の途中でWeb情報を収集するために多少時間がかかる場合があります。しかし特別なプラグイン等の導入は不要で、**標準のChatGPT機能内で完結**している手軽さも利点の一つです。

8. 開発者・角渕由英氏の背景と専門性

角渕由英（つのぶち よしひで）氏は、本GPTの開発者であり現在レクシード・テックパートナー（弁理士法人）に所属する弁理士です²⁵。東京大学大学院で理学博士号（化学専攻）を取得した後、特許庁登録調査機関や特許事務所に勤務し、**特許調査・分析のエキスパート**として活躍してきました⁴⁰⁴¹。特に先行技術調査、無効資料調査、技術動向分析といった分野を得意とし、化学・医薬から機械・ITまで幅広い技術領域の特許調査業務に携わっています⁴²。その実績が評価され、2017年には日本の特許検索競技大会において**最優秀賞（化学・医薬分野ゴールド認定）**を受賞しています⁵。また特許検索競技大会の運営にも関わり、現在は同大会の実行委員長を務めるなど、業界内で高い信頼と知名度を持つ人物です⁴³。

角渕氏は**技術者・研究者と弁理士の二つの視点**を併せ持つ点も大きな強みです。自身が発明者として特許出願を行った経験や学術論文の執筆経験も豊富であり、そのバックグラウンドを活かして発明内容の本質を捉えた助言ができると評されています⁴¹。知財業務におけるDX（デジタルトランスフォーメーション）にも精通しており、AIPE認定知的財産アナリスト（特許）などの資格も取得しています⁴⁴。近年は知財コミュニティ向けにブログ執筆やセミナー講師として情報発信を積極的に行い、**生成AIの知財実務への応用**というテーマでも先駆的な取り組みを行っています⁴⁵³⁵。本GPTの開発・公開もその一環であり、「誰でも使える生成AIツールによって知財情報の調査分析を身近にしたい」という思いが背景にあると考えられます。角渕氏の高い専門性と熱意によって生み出された生成AI特許分析GPTsは、**知財業界におけるAI活用の新たな実例**として注目され、今後さらなる発展が期待されています。

Sources: 角渕由英氏のNote記事【10】【13】【14】【16】、角渕氏の専門家プロフィール【33】【24】、知財実務情報Lab.の記事【18】、LeXi/Ventブログ【32】、野崎氏のNote記事【27】、Patentfield社の紹介ページ【35】他。

1 4 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 38 39 生成AI特許分析GPTsの
使い方 | 角淵由英 (つのぶちよしひで)

<https://note.com/tsunobuchi/n/n8420871afe23>

2 3 ChatGPT - 生成AI特許情報分析

<https://chatgpt.com/g/g-6820a5a16bd88191bc3cdbdf8fbbf1ff-sheng-cheng-aite-xu-qing-bao-fen-xi>

5 40 41 42 43 44 弁護士 / 弁理士 | LEXCEED | 弁護士法人レクシード | 弁理士法人レクシード・テック
| 姫路・博多・京都・東京

<https://lexceed.or.jp/professionals/tsunobuchi-yoshihide/>

25 31 32 45 特許文書の読み方（8）生成A Iをスクリーニングに活用する方法（2） | 知財実務情報Lab.®

<https://chizai-jj-lab.com/2025/04/08/0402/>

26 27 28 37 特許検索・特許分析に関するGPTs | 野崎篤志@イーパテントー知財情報コンサルティング®

<https://note.com/anozaki/n/n238e25e25436>

29 30 生成AI特許検索・調査・分析・査読 | Patentfield AIR | Patentfield株式会社

<https://evort.jp/article/patentfield-air>

33 35 生成AI（GPT、LLM）を活用した特許情報分析のポイント Part5（Chat-GPT Deep researchとの合
作） | LeXi/Vent 上村侑太郎

https://note.com/yu_py/n/n5642b7d3a0a1

34 WIPOの生成AIに関する特許出願動向レポートの概要

<https://ipadvisory.co.jp/wipogenai/>

36 角淵由英 on X: "今回は、生成AI特許分析GPTsの使い方を紹介し ...

<https://x.com/ytsunobuchi/status/1921712704659849373>